

## リンダウ・ノーベル賞受賞者会議 参加報告

大学院総合理工学研究科・知能システム科学専攻  
日本学術振興会特別研究員(PD)

7月1日から6日まで開催されました、リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に参加して参りました。この会議は毎年リンダウというドイツ南部の町で開かれ、ノーベル賞受賞者が若手研究者に対して講演を行う国際会議です。年度ごとに対象分野が割り振られており、今年度は物理分野が対象で、主にノーベル物理学賞を受賞された研究者の方々が招待されていました。日本からは14人の若手研究者が参加していました。

日程は、7月1日はレジストレーションやレセプションに充てられ、2日～5日はノーベル賞受賞者の講演、6日は参加者全員で船に乗って近隣の島への訪問と閉会式、という流れでした。4日間の講演を通して強く印象に残っていることは、ノーベル賞受賞者の、受賞後の人生の多様さです。受賞後も引き続き、受賞時と同じ研究テーマに取り組み、現役の研究者として研究されている方、また環境問題やエネルギー問題へと活動領域を変えられた方、また精神世界の話へと興味に移られた方など様々でした。御高齢の受賞者もたくさんいらっしゃいましたが、皆さん生き生きと講演されていました。

また今年度は、会議開催期間がヒッグス粒子(とみられる粒子)の発見について記者会見が行われた時期と重なり、会議中にはCERNでの会見の様子が中継されました。研究の最先端に触れられた、大変素晴らしい機会でした。

講演以外では、各国から集まった若手研究者の皆さんと交流の機会をたくさん持ちました。日本からは博士課程学生とポスドク研究者が参加しましたが、他国の参加者(特にアジア地域)は修士課程、博士課程の学生の割合が高いように感じました。ドイツ、アメリカからの参加者がほとんどでしたが、アジアからも多くの優秀な若手が参加していました。残念ながら、私の研究分野である統計力学やスピングラス理論では、ノーベル賞を受賞した方がいないため、関連分野の若手の参加を期待していませんでしたが、幸運にも何人か、自身の研究と近い分野に携わっている方々と情報交換をすることが出来ました。

リンダウ会議は、研究発表を目的とした一般的な国際会議とは大きく異なります。自分の研究に関する話題を仕入れたり、発表を行って自分の研究を知ってもらったりする、という通常の国際会議の参加目的とは異なり、将来につながる人脈形成が主な目的となっているように感じました。そういった意味では、リンダウ会議は一般的な国際会議と言うよりは、豪華なサマースクールという認識が当てはまると思います。

今回リンダウ会議に参加して、ノーベル賞受賞者の様々な研究観に触れることが出来ました。また、各国の若手研究者との議論を通して、他分野における研究状況や、各々の価値観を学ぶことが出来ました。今回の経験をもとに、自分自身の研究をさらに確立していきたいと思います。